

唐
糸
草
紙

唐糸草紙

怪きつゝわい奇い

かなざし—金刺

壽永二年の秋の頃、鎌倉の兵衛佐頼朝は、八ヶ國のさぶらひたちを、皆鎌倉へ召しのほせ、中門ちゅうもんに出でさせ給ひて、さぶらひたちに向つて仰せけるは、いかに方々かたが聞き給へ、そもく平家、頼朝が威勢に恐れてこそ、都をばおちて候ふに、木曾の左馬の頭義仲、十郎藏人行家らが高名かうみやうがほ顔に關白にやならん、主上にや參らん、法皇にやならんと、天下をほしいまゝに振舞ふことこそ、きつくわいなれ、平家退治のさきに義仲を退治せん、佐竹さたけの冠者くわんじやもその由を申し、奥州の秀衡も九郎冠者義經をのほせんと申すなり、この十月の頃なるべし、勢せいをのこさでつれたまへ、支度しだくせよとぞ仰せける。さぶらひたちはうけ給はり、かしこまると申して、皆國々へぞくだられける。をりふし其頃、鎌倉殿に唐糸からいこの前まへと申して、御所方ごしょがたの女房あり。これは信濃の國の木曾殿のさぶらひに、手塚の太郎かなざしの光盛みつもりが娘なり。あまりに琵琶の上手なり、琴もすぐれてあればとて、十八の年、鎌

奏者―取次

倉へ召しのほせ、管絃くわげんの座敷を預けらるゝが、唐糸は此由をうけ給はり、なさけなの事どもや、木曾殿の御滅亡くわげんは、親一門の滅亡なり、いかにもして此事を、木曾殿へきかせ奉らんとて、ひとま所へ忍び入り、文ぶんこまふと書き、下人の男にもたせて都へとてこそ上せらるゝ。下人鎌倉を出でて、十三日と申すには都につきて、父の手塚てづかが奏者そうしやにて、かの文ぶんを木曾殿へ奉る。義仲ひらきて御覽じて、これはいかなる風のたよりと思しめし讀み給ふに、鎌倉中にては木曾殿御退治の御評談、奥兩國と關東勢が、一つになり、十月の中頃に都のほりと申すなり、此たびのよろこびには、父の手塚に越後信濃をくだされよ、これにて唐糸がいかやうにも頼朝の御命を、一脇差わきざしあてがひ奉らん、木曾殿の御重代に、ちやくいと申す脇差わきざしをそへて給はれとこそ書いたりけり。義仲御覽じてなめなからず思しめし、御返事をあそばしける。そもく唐糸が忠臣をば山ほどに思しめす、此度のよろこびには越後信濃を取らするなり、唐糸それにて頼朝が命をとるならば、關東八ヶ國を父の手塚にとらせ、あめがしたの副將軍となさうするなり、唐糸をば、義仲が御臺になすべし、もし又露の命を失はど、父の恩に報ぜよかし、此事人にしらすなと書きとどめ、木曾に傳はる重代のちやくいと申す脇差をさしそへ下されける。下人は

忠臣―忠義の意

これを給はりて、鎌倉へこそ下りけれ。

唐糸御文見まゐらせ、なのめならず喜びて、かの脇差を肌身をゆるさず差しもつて、頼朝の睡眠すゐめんのたびごとに、狙ねらひけるこそ恐しけれ。さすがに頼朝は果報いみじき大將軍にてましくければ、とかく遁れ給ふぞめでたけれ。をりふしその頃、大御所さま、御臺さまの、薬の風呂の候ふに、かの唐糸も御とも申してまゐられける。其日の風呂の奉行には、土屋の三郎もとすけなり。もとすけ、唐糸の前が小袖のしたより、かの脇差を見つけつゝ、此きぬの主ぬしはたれ人ぞと尋ねける。ともの女房うけ給はり、唐糸さまの御小袖なりと申す。もとすけ、大きに驚き、あの唐糸と申すは木曾殿の内に手塚の太郎が娘なり、いかさまこれは我君さまの御命をねらひ奉る女なり、君に此事をしらせ奉らんとて、御所をさしてぞまゐりける。頼朝は御覽じて、何とてもとすけは風呂の奉行は申さぬぞ。もとすけうけ給はり、土屋が風呂の奉行に、寶を見つけて候ふぞ、御覽ぜよと奉る。頼朝御覽じて、さても不思議の事どもかな、これは木曾に傳はる重代にちやくいと申す脇差なり、何とてもとすけは見つけたるぞとの給へば、御所方の女房唐糸の前が、小袖のしたより見つけ申して候ふ、そも唐糸と申すは、木曾殿の御内みうちなる手塚の太郎かな

ざしの光盛が娘なり、いかさまこれは我君様の御命をねらひ奉るなり、御身近く寄せられ召使はるゝ御事、なか／＼君の御不覺なりとぞ申しける。頼朝きこしめし大きに驚き、唐糸召せとぞ仰せける。うけたまはると申して、御前へ召しいだす。御まへにかしこまる。頼朝御覽じて、何とて汝は木曾が重代にちやくいと申す脇差をばさしたるらんと問はせ給へば、これは木曾に仕へ申す時、かたみに見よとて給はりて候ふと申しける。頼朝きこしめし、女の形見に重代は似合はぬなり、先きづかひに思しめすまゝ世のしづまるまで、松が岡殿へあづけ奉れ、土屋とぞ仰せける。土屋うけたまはり、唐糸を引き具して、松が岡にあづけ奉る。其後土屋は唐糸の前が局にて、木曾殿よりの御文を見つけいだし、頼朝へ奉る。兵衛の佐殿御覽じて、天の與ふる寶なりとて、八幡の寶殿に深くこめおかる。もとすけはとにかくに、守護神なりとて、武藏の國池の庄、一萬貫の所を土屋にとてこそ下されける。其後唐糸召せとぞ仰せける。土屋うけ給はり、松が岡へまゐり、このよし申し上ぐる。松が岡にはきこしめし、そも／＼頼朝は日本の主となるべきものが、禮儀法度をしらで、日本の主になりがたし、いかにもとすけ物をきけ、佛は惡人を助けんため、淨土をたてさせ給ふ、その如くにこの界にても、惡人を助けんが

さんりん―未詳

舌を喰はん―舌を噛みて自害せんとも

ちやうにち―上日又は直日の意にて常番の者をいふ

ために、出家は佛舎をたつるなり、たとひ主に向つて弓を引き、親に向つて太刀^{たち}をぬき、牛馬の首^{くび}をきりたりとも、さんりんしたる惡人に子細はあらじと思ふなり、さやうに咎^{とが}を責むべくば、在家^{ざいけ}にあづけて置かずして、みづからに預け置き、咎^{とが}をせむべきとて還せとは、もとすけが不届^{ふとどき}か、頼朝の不届^{ふとどき}か、申すに及ばず、殊にみづから出家と申し、女といひ、頼朝はもとめて恥をかゝするか、舌を喰はんと御腹たつ。力及ばず、もとすけは御所さまへまゐり、此由をぞ申しける。頼朝きこしめし、その儀ならば、松が岡殿の御腹のなほるまで預けおき奉れとて、かさねて子細はまします。其後松が岡殿には、とにかくに唐糸は大事のものにて候へば、鎌倉中に置きてはあしかりなん、いそいで信濃へ下れとて、ちやうにちの者を添へらるゝを、忍びて信濃の國へぞ送られける。武藏の國六所^{うくしよ}と申すところにて、梶原平三景時は、上野の國沼田^{ぬまた}の庄にて、百日の日をふんで、いま鎌倉へ上るとて、唐糸と行きあふこそ本意^{ほんい}なけれ。景時見るよりも、それなるは唐糸か、我君の御命をねらひ奉るくせものなり、それくたぞと下知すれば、ちやうにちのものも、西東^{にしひがし}へばつと散る。そのとき景時は唐糸をおしこめて、鎌倉へ上りけるこそ本意^{ほんい}なけれ。梶原はわが家にも歸らず、唐糸をすぐに御所へひかせて参り、上野土産奉ら

ふのわるさーふ
は分にて天運の
意、ふがわるい
といふに同じ

んとてまるらせける。頼朝は御覽じて、これは何たる土産みやげにもましたるとて、大きに悦び給ひて、いかさまこれは唐糸がひとりの謀叛ひまにてはよもあらじ、鎌倉中にては、大名か小名の人数にんじゆあるべきぞ、松が崎にて七十五度の問狀もんじやうして問へとて、ものゝふどもにぞ仰せける。松が岡殿には此由を聞しめし、梶原と死なんとて、鎌倉へ御興おんこしがたつ。頼朝このよし聞しめし、まづこなたへ引けやとて、御うらの石の牢へぞ入れられける。唐糸がふのわるさ、君の御果報申すに及ばず。其後唐糸は信濃の國に六十にあまる老母と、十二になる姫をもたれけるが、唐糸十八歳の年、鎌倉へ上りしが、ことしは十二になると覺えたり。名をば萬壽まんじゆの姫と申しけり。唐糸の牢舎ろうしやのよし、信濃の國へ風たよりの便に聞えければ、そもこれは何事ぞとて、天に仰ぎ地に俯して、流涕こがれて泣きにける。萬壽涙をおさへて申しけるは、我身鳥ならば飛びも越し、母の行くへを聞かまほしうこそ候へ。尼公にこうきこしめし、みづからが歎きも汝には劣るまじ、今より後に逢ふ事もありもやせんと歎かれける。萬壽も一間所ひまどころへ歸り、衣きぬひきかつぎて、流涕こがれ泣きけるが、さ夜ふけ方に、乳母めのとの更科をめされ、いかにや、更科うけたまはれ、わが母の唐糸は、鎌倉に石の牢にましますとうけ給はり候ふぞ、わが身いかやうにも鎌倉へ尋ねこし、御ゆくへを

あとことも思はず
まことも思はず
思はずの誤か

をさあいをさ
なき人といふ意

みのぎぬ―美濃
絹
しけもん―惡し
き絹絲をしけと
いふ、それにて
織りたる絹をい
ふにや

尋ねきかまほしく候へ、更科をひとへに頼む、つれて鎌倉へ上りてくれよと申されける。
更科うけ給はり、をとことも思はず、親をば何とか尋ね給ふべき、萬壽さまとぞ申しける。
萬壽きこしめし、これはいはれぬ申しごと、みづから鎌倉へ上り、唐糸を親なると尋ね
て參らばこそ人も不審をたて候ふべき、鎌倉殿か、それなくば秩父殿か、和田殿へ、五年
も三年も、奉公を申し、鎌倉にあるならば、いかでか母の御ゆくへを聞きいださざるべ
きぞ、更科いかにとの給ひける。更科うけ給はり、をさあいの心にさへ親の御恩を申し
めす、たとひ賤しき者なりとも、お主の御恩をわすれ申さんや、野の末山の奥までも、
みづから御とも申すべしとぞ申しける。まんじゆ聞しめし、なのめならずしに思しめし。
さらば今宵に思ひたち、旅の装束せんとして、萬壽その夜の装束には、肌には練のあはせを
召し、親を尋ぬる門出なれば、めでたき事を菊染の御小袖、しけむらさきの織物に、十二
一重をひきかさね、柳色の袴をきて、市女笠をめされける。めのとが其夜の装束には、そ
めつけにみのぎぬの染小袖、七つひとへをひき重ね、麻の袴をきるまよに、しけもんの
つよみには、よろづの物を忍ばせて、乳母がこれをいたゞいて、故里を出でられける。
萬壽の姫も更科も、あとさき知らぬ旅なれば、山路のするに行きまよひ、呆れはててぞ

立たれける。萬壽仰せけるやうは、いかに更科うけたまはれ、鎌倉は東の方かたと承る、月日は東の空より出でて、夕日は西に入り給ふ、月日を心にあててゆけ、更科とのたまひて、月をしるべに行くほどに、既に其夜も明けければ、手塚の里にては、萬壽の姫、失せさせ給ふとて、貴賤きせん群集ぐんじふをなしければ、尼公にこう此由きこしめし、いか様これは、鎌倉の方かたへ出でたるらん、いそいでそれをとどめよとて、かちや徒跣はだしにて出でられける。信濃の國雨の宮といふ所にて、やがておつつき給ひける。

尼公にこう萬壽に抱きつき、いかに聞くかや、萬壽の姫、唐糸は、はや死にたるものと思ひしに、汝までみづからを捨て、鰐の口へ尋ね行き、鎌倉殿へきこしめさば、にくき唐糸が子なりとて、必ず死罪に行はれ奉らん、思ひとまれと泣き給へば、萬壽承り、みづから鎌倉へまゐりて、唐糸を親と申して、尋ねてまゐらばこそ、人も不審に思はんずれ、鎌倉殿か、和田殿か、秩父殿へ、二年も三年も御奉公を申すならば、いかでか母の御ゆくへ、尋ねいださで候ふべきと思ひ立ちてさふらふぞや。尼公聞しめし、其儀ならば、鎌倉の近くに、藤澤の道場と申して、遊行ゆぎやう和尚しやうの建て給ふ御寺あり、知る人のあれば、みづからは藤澤の道場に隠れるて、御身たちは鎌倉へこすべきなりとぞ仰せける。萬壽き



こしめし、人目を忍ぶ旅なれば、多勢おほぜいつれては
 叶ふまじ、其儀ならば、いかなる淵瀬へも身を
 投けて、浮世のひまをあけんと泣き給へば、尼
 公きこしめし、人の子の親を思ふこと、稀な
 る道と聞きつるに、さても汝は親孝行のもの
 かな、其儀ならば力なし、尋ねてもみよ、更
 科をひとへに頼むなり、よきに供してくれよか
 し、更科とぞ仰せける。めのとは承り、御供申
 していづるより、野の末山の奥、火の中水の底
 までも、共に入り、共に沈み申すべし、御心安
 くおほしめせ、尼公さまとぞ申しける。尼公は
 きこしめし、其儀ならば鎌倉へ下るまで、男
 ひとりつけんとて、五郎丸をぞつけ給ふ。さら
 ばと言ひて立ち別れ、そなたこなたへ行く袖の、

はらふ涙のひまぞなき。萬壽の姫は、雨の宮を立ち出でて通る所はどこぞ。親子の契は、ふかしの里こそめでたけれ。淺間の嶽に立つけぶり、身には餘れる思ひにや、いま入山をうち過ぎて、上野の國に隠れなき、常盤とこはなの宿しゆくをもうちこえて、一の御宮をふし拜み、二のたまはらに出でしかば、親の名のみか、ちよぶ山、末まつ山をうち過ぎて、霞の關をもわけこして、入間いりまの郡、やせの里、いくらの里をか越しつらん。曇らぬ

星の谷―相模に
あり
とがみ―砥上、
相模にあり

かけは星の谷やの、とがみ河原をもうち過ぎて、鎌倉山につき給ふ。鶴が岡に参り、南無や八幡大菩薩、よろづの御神にこえさせ給ひ、親孝行の御神とうけたまはりて候へば、わが母の唐糸の露の命のうちにめぐり逢はせてたび給へと、肝膽をくだいて祈られける。

其夜はこもりゐて、明けぬれば、文ふみこまくと書かれける。みづから何事なう鎌倉まで参りて候ふ、とにかくに、うばさまの、御命をよくく惜ませたまふべし、命をまたう持つ龜は蓬萊にあふとかや、ある歌に、

命をまたう云々
―詠

命あらばいくよの秋の月や見ん消えてはいかに露の玉の緒
と聞く時は、たと命がせんにて候ふぞや、御命ましくこそ、唐糸にもみづからにも又

尋ぬるものが一
たのめるものが
の行か

人の返事をわが
にして―他人の
返事したる用も
自分にて辨じて
きよう―器用か

はあはせ給ふべけれと書きとめて、鎌倉山より手塚の里のうばさまへ、萬壽姫とがきて、五郎丸をば鶴が岡へつき、これまでなり、さらばとて、それより手塚の里へ返さる。そののち萬壽姫は、御所さまへまゐり、御奉行をのぞまれける。御臺さまには聞召し、國はいづくの者なるぞ、親をばたれと申すやらん。萬壽うけ給はり、武藏の國六所別當の者にて候ふ、親を名のり申すまじ、御奉公申すならば、尋ぬるものが親にて候はんとぞ申されける。御臺此由きこしめし、親を名のり申さねば、御氣づかひに思しめす。まづまづ侍從の局にて奉公申せとのたまひ、御局がたへ預け給ふ。萬壽は侍從の局にてよきに奉公つかまつり、人の返事をわがにして、人の立たん所へも、わがものと立ちゆけば、御局がたにも、萬壽はきよようの者なりとて、御なさけをぞかけ給ふ。廿日の過ぐるその間、萬壽は人の物いふたびごとに、わが母の唐糸と、名にても人の申すかと、聞けども聞けども言はざりけり。ある夜の寢覺に萬壽、乳母に語られけるは、いかにや、更科うけたまはれ、今まで廿日あまり過ぐるうちに、唐糸と名にても人の申すかと、聞けどももく申さぬは、浮世にもなきか、生きて浮世にあるならば、人をばよかれあしかれ沙汰する習ひなり、名をだに申す人もなし、必ずこれは死したる人なり、卅二日たづねき

萬事はとまれ—
是非とも留りく
れよ

みづしー下女

て、逢はではつべき悲しさよと、ふし沈みてぞ泣かれける。めのととは大きに腹をたて、信濃を御いでの際は、二年も三年も、鎌倉中にましまさんと仰せありしが、いまだ廿日も過ぎざるに、さやうに御涙をながさせ給はゞ、涙の色にて人に知られ、必ず死罪にあひたまはん、其儀ならばみづからは是にて憂目うれめをみんよりも、あすは信濃へ歸り申さん、御身ばかりになり給へ、萬壽さまとぞ腹をたつ。萬壽大きに驚き、めのと、更科にいだきつき、其儀ならば今より後は歎くまじ、萬事はんじはとまれと泣き給ふ。めのと主ぬしも泣きあかす。夜も既に明けければ、萬壽姫は御主おしうさまの御うらへ出でて、あたりを眺めて御覽する所に、いづくともなく御みづし一人まゐり、いかにやのう萬壽、此釘門くぎもんのうらへ入らせ給ふな、御法度ごはつさなるとぞ申しける。萬壽きこしめし、御法度ごはつさはいかにと問はせ給へば、みづしうけ給はり、御所様がたの御女房、唐糸の前と申すは、石の牢につきこめられしに、これよりあなたへは、男女おとこをんなによらず、御法度なりとぞ申しける。萬壽きこしめし、唐糸といはれて、雪ならば消え入るばかりに嬉しくて、みづしはよく教へ給ふ、われは夢にも知らぬなりと、喜ぶ體ていにて御所へまゐり、めのとを近づけて、唐糸さまの御ゆくへを、只今きいて候ふぞ、よろこび給へと言ひながら、又かきくどき泣きたまふ。

人の咎めぬ一人
を咎めぬの誤か
あまー天

岩が根さわぎあ
たるー岩が根に
さわぎあたる意
みなかー亥中、
十時頃

めのとも喜びの涙をぞ流しけり。

頃は三月廿日に鎌倉山の花見とて、をりふし御所には人もなし。萬壽は、こよひ母の御
ゆくへを尋ねて見んとて、御所のうちをば忍び出でて、釘門くぎもんをみてあれば、正八幡の御
方便かや、をりふし番衆もなかりけり。門も細目ほそめにあいたるなり。萬壽は嬉しけれども、
よその見る目もあるらん、人の咎めぬ里犬さといぬあるやとばかり疑はれ、めのとをば御門の脇に
たゝせて、わが身は内へたづね入り、かなたこなたを尋ねけり。あま吹きおろす松風の、
岩が根さわぎあたるをば、人やあるかと疑はれ、心を静めてあたりを見る。廿日るなか
の雲はれて、月すこし見え給ふ。松の一むらある中に、尋ね入りて見てあれば、石の牢
こそ見えにけれ。萬壽うれしさに急ぎたちより、牢の扉しきりに手をかけて、内の體ていを聞きけ
るに、唐糸は人音ひとおとを聞きつけて、そもく門かどにおとづるゝは誰なるらん、變化へんけのものか、
又は唐糸が討手にばし向く人か、御使にてましまさば、浮世のひまをあけたしと、かき
くどきてぞ泣きにけり。

萬壽は承り、いとど哀れはまさりけり。牢のすきより手を入れて、母の手をとり、これ
は母の手にてましますか、わが身は萬壽にてさふらふぞや、なつかしさよと泣きにける

涙は淵となる。唐糸聞きて、萬壽は信濃にこそおきつるが、今年は十二になると覺えたり、夢かうつゝか幻か、夢ならばとく醒めよ、さめての後はうらめしやと、かき口説きてぞ泣かれける。萬壽、おほせの如く信濃の國にさふらふか、御牢舎ごろうしやのよし風のたよりに承り、御命に代らんと、これまで参りて候ふぞ。唐糸きこしめし、其時萬壽が手をと、嬉し泣きにぞ泣き給ふ。御涙をおさへ、うばさまの御命はいまだめでたうましますか、なつかしさよと仰せける。萬壽うけ給はり、何事もましまさず、御心やすかれと申しければ、唐糸聞きて、汝ばかり参りたるか。萬壽うけ給はり、更科をつれてまゐりける。唐糸きこしめし、いづくに忍ばせ置きけるぞや。萬壽申しけるやうは、よその見る目のいぶせさに、御門の脇にたゝせておき申し候ふとて、やがてつれてぞ参られける。唐糸御覽じて、更科めづらしや、唐糸がありさまを、不便と思ふべし。萬壽は親子の契なれば、尋ねてのほるもことわりなり、汝はめのと云ひながら、他人にて候ふものが、これまで上るは不思議なり、昔より世にある主しうをば尋ねれども、世におちぶれたる主しうの跡たづぬるものは、上代にも聞き及ばず、末代にもあらじと、互に流す涙の色、ふる雨のごとくなり。其後唐糸、涙をおさへて仰せけるは、御身も人も、生きて浮世の對面

思ひきり―決心
し
はつたと―斷じ
て

しろがへて―賣
りしをなして食
物などを求めて
しゝの間―獅子
の間なるべし

して、浮世の妄執まうしふはれてあり、更科をひとへに頼み申すぞ、つれて信濃へ歸り申せと仰せける。萬壽うけ給はり、信濃の國を出でしより此かた、御命おんいのちに代らんと思ひきり、まゐりて候ふ、はつたと信濃へ歸るまじと泣きければ、唐糸きこしめし、その義ならば、たびくまるるなよ、人に知られて候はど、君よりも唐糸が子なりとて、我よりさきに死罪・流罪に行はれ奉らん、よくく忍べと泣かれける。萬壽承り、國をも名のり候はねば、存ずる人も候ふまじと、涙を流し語る。夜すでに明けければいとま申して、さらばとて御所のうちへ歸りつゝ、小袖を町まちへいだし、しろがへて、めのとが忍ぶ時もあり、みづからが忍ぶ時もあり、九月こゝのつきがその間、母を養ふあはれさよ。次の年の正月二日に、鎌倉殿の常に御祈念をなさるゝ、しよの間まの御座敷に小松六本、疊ふみのへりに根をさし、生はえいでたるこそ不思議なれ。頼朝大きに騒さわがせ給ひ、かやうなる草木さうもくは、土にこそ根のさすに、疊ふみのへりに根をさし、生はひいでたるこそ不審なれ、鎌倉中のわづらひか、又は頼朝が身のうへか、博士を召せとの給ひて、其頃鎌倉中に隠かくれなき安倍あへの中もちと申す博士をめされて問はせ給ひける。いかにや、中もちうけ給はれ、常に祈念するしよの間の座敷に、今夜こよひの内に、小松が六本生ひいでたり、鎌倉中のわづらひか、頼朝が身の上

ちんやさいかい
―未詳

か、天下の亂れか、占へとぞ仰せける。博士承り、そもく萩萩の、花の命をのぶること、あまたとは申せども、西王母^{せいわうぼ}が園の桃、三千年に一度^さ花さき、實のなると申せども、見る人も候はず、ちんやさいかい八千世^{やちよ}の年をふることも、ちくさの八千年をふることも聞くに、一千年の壽命^{じゆみやう}も、相生の松にしくことはなし、そもく君が千代をかさねて六千歳、鎌倉山に年をよせ、榮えさせ給ふべき、かほだめでたき御事に、相生の松が枝を鶴が岡の玉垣の御内に蓬萊をうつしかへ、十二人の手弱女^{たぢやめ}をうつして、今様^{いまやう}を歌はせたまはど、神徳を深く君もめでたうましまさんと、占ひたるこそめでたけれ。

頼朝なために思召し、六本の小松を鶴が岡の玉垣の内へうつし、十二人の手弱女^{たぢやめ}を揃へらるゝ。まづ一番には手越の長者が娘千壽のまへ、二番には遠江の國ゆやが娘の侍従、三番には黄瀬川の龜鶴^{かめつる}、四番は相摸の國山下の長者が娘虎御前^{とらごぜん}、五番は武藏の國入間川のほたんといひし白拍子、これをはじめて十一人なり。鎌倉中廣しと申せども、ひと一人に事を缺き、色々尋ねらるゝ。其後萬壽の姫のめのは、萬壽を近づけて、御身はみめよく、今様は上手にてましませば、此度出でて今様を歌はせ給へ、萬壽さまとぞ申しける。萬壽きこしめし、このたびの今様は世の常の今様にかはりて、めでたき事をばみ

むしのらせと一
虫の威勢か

づから何と計らふべき、思ひもよらずと仰せける。更科大きに腹をたて、かやうなる時、
今様をうたはせ給ひてこそ、御よろこびもましまさんとて、御局さまへ参り、萬壽こそ、
今様の上手にて候へと申し上ぐる。御局よりも、御臺さま、頼朝さまへ御披露あり。頼
朝大きによろこび給ひ、萬壽一目みんとて御前にめされ、御覽じて大きによろこび、御臺
さまより十二ひとへの御装束をぞ下されける。もとより姿すぐれたり、肩をならぶる女
はなし。頃は正月十五日、御前に山をたて、大宮のゆんでは頼朝の御座敷、八ヶ國の
大名小名の御座敷、かず八百八とぞ聞えける。さて又めてには、大御所さまと御臺さま
の御座敷をはじめとして、八ヶ國の大名衆のうへがた上臈衆の御座敷かすを知らず。鎌
倉中の貴賤上下がまゐりて見物申しけるほどに、鶴が岡に駒を立つべきかたもなし。十
二人のやをとめ、七十五人の宮人、神樂を奏して奉り、手越の長者が娘、千壽の前ときこ
えける、貴賤群集の言の葉に、海道くだりをつゞけたり。逢坂山のよるの月、くもらぬ
影をやながむらん、勢多の唐橋野路の里、霞にくもる鏡山、不破の關屋の板庇、假寢の
夢はやがて醒が井の宿、むしのいせいやをはりの國、みかはなる三河にかけし八橋の、
くもでに物や思ふらん、知るも知らぬも遠江の、濱名の橋のいるしほに、さよねど上る

ひきま—遠江の
引馬
せと—駿河の瀬
戸山

しほりはぎ—し
をり萩

ナとりわり—硯
破

くじ—鰯

はぶき—羽を振
る
やつ—谷

谷「たに」と傍
訓せるは「やつ」
の誤なるべし
から聲—眞聲
ふくでん—福田
か

あま小舟、こがれて物や思ふらん、ま弓つき弓ひきまの宿、さよの中山せとを過ぎ、う
つの山邊の鳶のみち、手越をすぎて行くほどに、月を清見が關の戸を、おし明けがたの
空みれば、富士の煙や靡くらん、夢にもみやこ人こそめでたや、御代にはいづの國、浦
島が玉手筈、あけて悔しき箱根山、鎌倉山をきてみれば、鶴が岡とや申すらん、鶴は千
年名鳥、松は千とせの名木、めでたしと歌うたり。二番は黄瀬川の鵜鶴、しほりはぎを
歌うたり。伊勢の濱荻なにはの蘆、鎌倉や武藏野の、草の名多しと申せども、しほりは
ぎにしくものは候はじと、歌うたり。三番はゆやが娘の侍従、太平樂をふむ。四番は入
間河のほたん、すどりわりを歌うたり。五番のくじは萬壽なり。御臺さまより御装束給
はる。としは十三の春なれば、十二ひとへを著しつゝ、花のまそでを返し、樂屋のうちよ
り出でけるを、物によく／＼譬ふれば、花木に鶯のはぶき出でたる風情も、是にはいか
で勝るべき、はたとあけて歌うたり。鎌倉はやつ七郷とうけ給はる、春はまづさく梅が
やつ、扇の谷に住む人の心はいとぞ涼しかるらん、秋は露おくさゝめがたに、いづみふ
るかや雪のした、萬年かはらぬ龜がへの谷、鶴のからぐる打ちかはし、由比の濱にたつ波
は、いくしま、江の島つゞいたり、えのしまのふくでんは、福壽海無量の寶珠をい

うつら—未詳

みなしろ—皆白
にて全部白きを
いふ

たんこふしき—
未詳

はんで—誤脱あ
るべし意味通じ
難し

だき参られたり、君が代はさざれ石のいはとなりて苔のむすまで、高砂や相生の松萬
歳樂に、御命をのぶ、東方朝の九千歳、うつらの八萬歳、長命居士の一千歳、西王母
の園の桃三千年に一度花さき、實のなると申せども、相生の松にしくこさふらふまじ、
そもく君は、千代をかかねて六千歳さかえさせ給ふべき、かほだめでたき御ことに相
生の松がえ、福壽無量のよろこびを、君に捧げ申さんと、小松の枝をゆりかづき、みな
しろの大まくへ、二三度四五度まひかよりたりければ、頼朝御覽じて、ほうらいにたち
ゑほし、白鞘卷をさしながら、みなしろの大幕を、投げあけて、かゝるめでたき御こと
に、相生の松が枝を給ふらんとて出で給ふ。もとより頼朝は今様は上手なり、たつ波る
る波よする波、引きしほの拍子足を、たんこふしきと踏んで、扇流しを歌ひすまし、萬
壽が花のたもとへ、頼朝の狩衣の御袖、まひかさねく、二三度四五度舞はせたまへば、
風も吹かぬに大宮のたまの戸もきりくばつと開き、八幡も御納受ありときこえける。
さるほどに八百八つのみす簾の几帳もざよめいて、貴賤群集を返しける。そののち頼朝
は座敷のうちへ入り給ふ。萬壽姬は樂屋のうちへと引いて入る。頼朝仰せけるやうは、
たれやの人か計らふべしめでたくもはんでをさめよとて、今様はまします、春の日の

くるゝまで酒盛^{さかもり}とこそ聞えけれ。其目もかたぶけば皆々鎌倉へぞ歸らせたまふ。さて次の日、頼朝は萬壽を御前^{おまへ}に召し出だして、さて汝は今様の上手かな、めでたうこそは歌うたれ、國はいづくの者なるぞや、親をばたれと申すらん、親をなのれ、御引出物給はるべきとぞ仰せける。萬壽うけたまはり、名のり申すまじと思へども、此たび名のり申さずは叶はじと思ひけん、思ひきりてぞ名のりける。みづからが親は御所様の御うらの石の牢につきこめ給ふ唐糸にて候ふなり、されば四つ子にて棄てられさふらふが、去年^{ねん}の春の頃、母が牢舎^{らうしや}のよしを、信濃の國にて承り、今はあるにもあられずして、母の命に代らんとおもひ、これまでまゐりて候ふぞや、このたびの今様の御引出物^{おんひきいでのもの}には、母が命にみづからを取代へてたび給へとぞ申しける。頼朝きこしめし、大きに御おどろかせ給ひ、しばらく物をものたまはず。稍あつて仰せけるは、唐糸は汝が母にてありけるぞや、唐糸を助くる事は、烏の頭^{かしら}が白くなりて、駒に角のはゆるとも助くまじとは思へども、此たびのよろこびには、いづれの物か惜からん、唐糸が露の命、今まで存命^{ぞんめい}にてあるならば、急ぎ召しだし、萬壽に取らせよとぞ仰せける。土屋うけたまはると申し、石の牢を引きやぶらせ、二とせに餘る牢舎せし唐糸をめしだし、御所さまの庭に

ふしのゆひわた
―富士の結綿か
御ひき―御引出
物
美濃のじやうは
ん―美濃絹の上
品

ばんじの床―萬
事休する程の重
病の床に泣き伏
すとの意なるべ
し

召し具して、萬壽にこそ渡されける。萬壽なのためによろこびて、母にひしと抱きつき、嬉し泣きに泣きければ、母もろともに涙をながす。頼朝をはじめ奉り、大御所御臺みだいいづれもましますさぶらひ達、人の寶には子にましたる寶なし、さても萬壽は女とも思はず、十二三のものが、これまでまり、鰐の淵なる親を助けたる、不思議なりと、みな感涙を流しけり。其後頼朝は萬壽に引出物をえさせんとて、信濃の國手塚の里一萬貫の所をば、萬壽にとてぞ下されける。御臺さまより黄金こがね千兩ふしのゆひ綿一千把は、萬壽が宿へぞ送られける。大御所さまの御ひきには砂金五百兩、美濃のじやうはん一千匹下されける。これをはじめて鎌倉中の諸大名、われもくと引出物萬壽姫にたまはりける。頼朝仰せけるやうは、萬壽をば鎌倉にとどめたくは思へども、母が心の恐しきものなれば、いそぎ信濃へかへれとて、御いとまをぞ給はりける。萬壽なのために喜びて、唐糸をひきつれて信濃へとてこそ歸りけれ。のほりには三十二日に上りしが、かへりには五日にこそは下られける。手塚の里におちついて、うばの尼公を見申すに、ばんじの床ゆかに泣きふして、今をかざりと泣き給ふ所へ、萬壽まゐりて候ふ、いかにや申さん尼公さま、われわれは萬壽にて候ふぞ、これは唐糸にておはしますと申しければ、尼公は親子のものを

御覽じて、うれし泣きにぞ泣き給ふ。一族一家のものまでも、よろこびの涙を流す。されば萬壽、親孝行なるゆゑにより、鶴が岡の八幡大菩薩の御方便にて、今様をうたひ、所領を給はり、二とせあまり牢合せし母をたすけ、かすの寶を給はりて、子孫ともに繁昌するなり。萬壽姫の親孝行ゆゑなりとうけ給はり候ふ。かゝるめでたき物語かなと、感ぜぬ人はなかりけり。